

父親にとつての 子育て体験の意味

牧野暢男

子育てに関与する度合いが大きい父親ほど父親としての自覚が強く、人間として成熟したと感じています。それは子どもにとつてもいい成長発達につながるのではないのでしょうか。

わが国では「子どもを育てることは親も成長することである」「親が育てば子も育つ」という子育て論が展開されていることは、皆さんもお気づきのことだろうと思います。これは「子育て」と「親の人間的な成長」を相互関連的で一体的なものとして捉え、子どもを上手に育てるためには、親自身が人間として成長する必要があるということを読くと「子育て論」であるといえます。また、子どもを育てたことのあるほとんどの親は、何らかの意味で「子どもに『教えられる』体験をもつてい

るともいえるでしょう。しかし、実際に調べてみますと、本当に子育てによって親も育つのか、また、子どもの発達のような段階で親はどのような人間としての影響をうけるのか、さらには子どもを育てる中で親も一緒に育たないと子どもはうまく育たないのかなどについて科学的に立証するデータは意外に乏しく、子育てと親育ちとの関係はより科学的に明らかにされる必要がある課題であると思います。

に質問紙法による統計的調査を計画しましたが、この問題についての先行研究がまだきわめて少ないため、本調査を実施する前段階として、まず自由回答方式による予備的調査を実施しました。ここでは、乳幼児から大学生までの子どもを持つ親に「子育てをして自分が何か変わったと思うかどうか」また「変わったとしたらどのような点が変わったと思うか」について自由に記述してもらいました。そして、その結果について内容分析を行ったところ、親自身の変化の内容は三〇以上の多様な内容を含んでいることが分かったわけですが、ところで、子育てに伴う親の変化については、先行研究として柏木恵子氏と大日向雅美氏の統計的調査研究がありますが、そのどちらも乳幼児や

1 研究の視点と枠組み

幼児という年齢の低い子どもを持つ親を対象としています。それはそれでいいのですが、ここでわれわれが問題にしたいのは、同じ子育てから得られる体験といっても、それは子どもの発達段階や子どもの性別などによって異なり、したがって親が影響を受けたり変わったりする側面も違ふのではないかということです。例えば、はじめて子どもが生まれたときに受ける感激や影響は大きなものですが、乳幼児期の可愛い盛りの子育て、児童期の子育て、思春期になってからなど、子どもの発達段階に応じて、親はそれぞれに異なった子育て体験をしていくことになるのではないかと思われ

また、親自身が子育てにどのように関わったかという点も、親の変化に関係していることが考えられますし、その他にも夫婦のパートナーシップのあり方や子どもが親に対してどのような働きかけ方をしていたか、子どもが育て易い子どもだったかそれとも育てにくい子どもであったかなどということも、親の変化に関係があるのではないかと

と推測されます。われわれが親の変化とそれに及ぼす要因関連をどのように考えているかを大まかに示せば図1のようになると思います。本発表では親の変化の全体像、子育てへの関与の度合いと親の変化の関係、父親と母親のパートナーシップと子育て関与の関係に焦点をあてて見ておきたいと思えます。

2 父親の変化の内容分析

次にわれわれが行った調査結果の分析に移りたいと思います。ここで取り上げるデータは、一九九一年一月～二月に川崎市の公立幼稚園と小学校（二校）中学校（二校）の父母を対象に実施したもので、分析の対象としたのは、父親五五八

名、母親六六八名です。親がどのように変化したかについては、自由回答方式を用いた予備的な調査結果から三八項目にわたる変化項目を作成し、それに対する回答をまず因子分析して父親の変化の内容がどのようなも

と推測されます。われわれが親の変化とそれに及ぼす要因関連をどのように考えているかを大まかに示せば図1のようになると思います。本発表では親の変化の全体像、子育てへの関与の度合いと親の変化の関係、父親と母親のパートナーシップと子育て関与の関係に焦点をあてて見ておきたいと思えます。

団 士郎／柴田長生／川崎三三彦／早樫一男／川畑 隆著
シリーズ 家族の居心地

非行と家族療法

A5判美装力バー200頁／定価1,600円

万引きや暴力、シンナー、不純異性交遊なども、ごく普通の家庭でごく普通に育ってきた子がひきおこしている。児童相談所で家族療法した事例を検討し、子どもと家族・子どもと学校の間を調べる。親、教師にすすめたい本。

- 目次――
1.家族の側から非行を見る
2.島へ帰った少年
3.努力を外にみせない父親
4.家族がさすなをとりもどす時
5.家族の秘密
6.父が母のパートナー

ネルヴァ書房

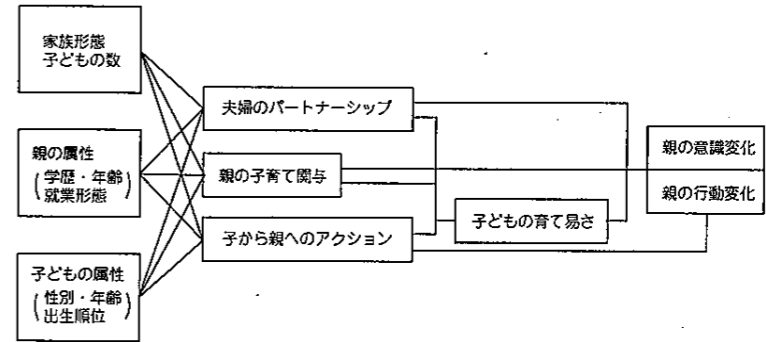


図1 調査の枠組み

表1 親の変化に関する因子

因子	No.	項目	父親	母親
			因子負荷量	因子負荷量
①親としての自覚	21	親としていい加減なことではできないと思うようになった	.70	.62
	31	子どもの手本になるように心掛けるようになった	.70	
	30	子どもというものに対する理解が深まった	.69	.62
	22	家族の生活の安定を考えるようになった	.65	.61
	33	人への接し方が変わった	.65	.59
	38	生活にハリが出てきた	.64	
	28	子どもの視点からものをみるようになった	.63	.55
	25	健康や体に気をつけるようになった	.61	.56
	27	子どもの行動や態度をみて自己反省するようになった	.61	.59
	34	自分の親への接し方が変わった	.60	
	36	弱いものをいたわるようになった	.60	
	18	親としての生き方を考えるようになった		.55
26	他人の子どもへの接し方が変わった		.55	
32	人間関係が広がった		.55	
②人間としての成熟	5	性格が丸くなった	.76	.72
	7	気が長くなった	.74	.66
	8	精神的に強くなった	.68	.68
	6	物事を多様な角度からとらえるようになった	.62	.63
③ストレス	2	忍耐力がついた	.60	.64
	4	物事にあまり動じなくなった	.60	.68
	15	神経質になった	.75	.65
	13	悩むことが多くなった	.57	.56
11	気が短くなった	.54		

注) No. は調査票の質問番号を示す。

のであるかを明らかにしました。その結果、表1に見られるように、三つの因子が抽出されています。

第一の因子(寄与率七二・七%)は、「親としていい加減なことではできないと思うようになった」「子どもの手本になるように心掛けるようになった」

た「子どもというものに対する理解が深まった」「家族の生活の安定を考えるようになった」など一二の項目を含んでいます。これは大抵、ひとの「親としての自覚」という言葉でまとめることができるように思われます。

第二の因子(寄与率六・七%)は「性格が丸くなった」「気が長くなった」「精神的に強くなった」「忍耐力がついた」などの六つの項目です。これは性格、ものの見方、精神面などいわばパーソナリティや人間的な成熟をあらわすものであり、「人間としての成熟」と名付けておきます。

第三の因子(寄与率五・一%)は、「神経質にな

った」「悩むことが多くなった」「気が短くなった」の三項目です。ここではこれらをストレスに関わる因子という意味で「ストレス」と名付けておきます。

なお、この三つの因子は母親についても抽出されましたが、因子負荷量は父親よりも小さい項目

が多く、例外は「親としての自覚」に関しては「親としての生き方を考えるようになった」「他人の子どもへの接し方が変わった」「人間関係が広がった」の三項目、「人間としての成熟」に関しては「物事にあまり動じなくなった」「忍耐力がついた」の二項目です。

「親としての自覚」と「人間としての成熟」の二つの因子に関しては、かなり多くの項目が、有意な関連を示しています。

3 子育てへの関与と父親の変化の関係

次に、子育てへの関わり方がどの程度であったかということと父親がどのような変化をしたかとの関係を見てみましょう。

表2を見て下さい。ここには、カイ二乗検定により子育てへの関与の度合いと有意な関連を示した項目が*印で示されています。

ここで子育てへの関与の度合いは「子どものおむつをとりかえる」(以下「おむつのとりかえ」)、「子どもの相談相手になる」(以下「相談相手」)、「子どもに本を読んであげる」(以下「本を読んであげる」)、「子どもと一緒に遊ぶ」(以下「一緒に遊ぶ」)、「子どもの勉強をみてやる」(以下「勉強を

みてやる」)、「子どもを風呂にいれる」(以下「風呂にいれる」)、「子どもの病気を看病する」(以下「病気の看病」)、「子どもに生活習慣のしつけをする」(以下「しつけ」)の八項目についての回答を点数化し、関与度の強さにより三段階に分けて分析に使っています。

「親としての自覚」と「人間としての成熟」の二つの因子に関しては、かなり多くの項目が、有意な関連を示しています。

シリーズ／家族の居心地
登校拒否と家族療法
 団士郎／柴田長生／川崎三彦／早樫一男／川畑隆 著

A5判美装カバー・200頁 定価一八〇〇円
 価格は税込みです。

児童相談所における登校拒否の家族療法・症例を紹介しながら、家族のあり方を読者とともに考えていく。家族成員それぞれのスタンスの置き方・立場がはっきりしていくにつれて、症状が改善されるのはなぜなのか。小中高の先生、お父(母)さんにぜひ読んでほしい本。

〈内容目次〉

第1章 家族の診断 (核家族/父・母・姉・弟)
 第2章 サタデーナイト・ドライバー (三世代家族/祖母・父・母・兄・弟)
 第3章 I.P.の写真 (単親家族/母・弟)
 第4章 夫婦の白いスーツ (核家族/父・母・兄・弟)
 第5章 「理想」の運搬遭敗 (三世代から核家族へ/祖母・父・母・弟)
 第6章 「これが、その答えです」 (核家族/父・母・弟・妹)

ミネルヴァ書房

表3 子育てへの関与と親の変化との関連 (χ²検定結果)

親の変化項目	父 親				母 親			
	しつけ	おむつ のとり かえ	相談 相手	本を読 んであ げる	しつけ	おむつ のとり かえ	相手 相談	本を読 んであ げる
親としていい加減なことではできないと思うようになった	***	***	*	***			**	
子どもの手本になるように心掛けるようになった	***		***	**				
子どもというものに対する理解が深まった	***	**	*	**	*		*	
家族の生活の安定を考えるようになった		**				*		
人への接し方が変わった		**				*		
生活にハリが出てきた	**	*						
子どもの視点からものをみるようになった	***	***	**	**				
健康や体に気をつけるようになった	***		**					
子どもの行動や態度をみて自己反省するようになった	**	**		**	*			
自分の親への接し方が変わった	*							
弱いものをいたわるようになった	*							
親としての生き方を考えるようになった					*		***	
他人の子どもへの接し方が変わった					***			
人間関係が広がった								
性格が丸くなった					*			
気が長くなった					*			
精神的に強くなった		**	**			**	*	
物事を多様な角度からとらえられるようになった	*	**	**	**			***	
忍耐力がついた	*	**					**	
物事にあまり動じなくなった	***	**				***		
神経質になった								
悩むことが多くなった								
気が短くなった								

注) 5.0%***, 1.0%***, 0.1%*****

表2 子育て関与度×因子項目 結果

因子	No.	項 目	父 親		母 親	
			因子負 荷量	子育て関与 度との関連 (χ ² 検定)	因子負 荷量	子育て関与 度との関連 (χ ² 検定)
①親としての自覚	21	親としていい加減なことではできないと思うようになった	.70	***	.62	
	31	子どもの手本になるように心掛けるようになった	.70	***		
	30	子どもというものに対する理解が深まった	.69	**	.62	**
	22	家族の生活の安定を考えるようになった	.65	*	.61	
	33	人への接し方が変わった	.65	**	.59	
	38	生活にハリが出てきた	.64	**		
	28	子どもの視点からものをみるようになった	.63	**	.55	*
	25	健康や体に気をつけるようになった	.61	**	.56	
	27	子どもの行動や態度をみて自己反省するようになった	.61	**	.59	
	34	自分の親への接し方が変わった	.60			
	36	弱いものをいたわるようになった	.60	**		
	18	親としての生き方を考えるようになった			.55	**
26	他人の子どもへの接し方が変わった			.55		
32	人間関係が広がった			.55		
②人間としての成熟	5	性格が丸くなった	.76	*	.72	
	7	気が長くなった	.74	*	.66	
	8	精神的に強くなった	.68	***	.68	
	6	物事を多様な角度からとらえられるようになった	.62	**	.63	
	2	忍耐力がついた	.60	**	.64	*
	4	物事にあまり動じなくなった	.60	**	.68	
③ストレス	15	神経質になった	.75		.65	
	13	悩むことが多くなった	.57		.55	
	11	気が短くなった	.54			

注) No. は調査票の質問番号を示す。(5.0%***, 1.0%***, 0.1%*****)

な関連を示しています。「相談相手」は「親としての自覚」因子について五項目、「人間としての成熟」因子に関して二項目、「本を読んであげる」は「親としての自覚」因子について五項目、「人間としての成熟」因子に関して一項目が有意な関連を示しています。つまり、父親はこうした子育てに関わることで、親として自覚することになったり、人間として成熟していくことになるというようです。一方、「病気の看病」「勉強をみてやる」「一緒に遊ぶ」「風呂にいれる」の四つは、「親としての自覚」や「人間としての成熟」に含まれる親の具体的変化とほとんど有意な関連を示していません。

なかつた父親よりも「親としての自覚」が強まるといえるでしょう。そして「人間としての成熟」についても同様なことがいえます。子育てに関わった者ほど「精神的に強くなった」り、「忍耐力がついた」と答えている者が多いというわけです。しかし、「ストレス」に関しては、父親の子育てへの関与の仕方は有意な関連が認められません。ここでは、母親では子育てへの関与度と「親としての自覚」「人間としての成熟」のいずれにもあまり有意な関連が認められないのに、父親の場合には非常に関連が強いという点に注目しておきたいと思えます。

そこでさらに、父親の変化をもたらす具体的な子育てへの関与はどのようなものかを見てみることにします(表3)。

これについては、親の個々の変化項目と子育て関与項目を個々にクロス分析を行ったところ、有意な関連を示した子育て関与項目は「しつけ」「おむつのとりかえ」「相談相手」「本を読んであげる」の四項目です。「しつけ」は「親としての自覚」因子について九項目、「人間としての成熟」因子に関して四項目が有意な関連をもち、「おむつのとりかえ」は「親としての自覚」因子について七項目、「人間としての成熟」因子に関して四項目が有意な関連を示しています。

4 父親の子育て関与と夫婦のパートナーシップの関係

では次にクロス分析によって、父親の子育て関与（八項目）と夫婦のパートナーシップの関係をみてみます。ここでは夫婦のパートナーシップを表す質問項目としては、「私たち夫婦は助け合って生活していると感じる」「妻は私の気持ちを理解している」「私は妻に満足している」という三つの質問に対する回答を使い、それぞれの質問に対する回答を点数化して「夫婦関係」を表す指標をつくり、それとの関係もみています。

分析の結果、まず「おむつのとりかえ」以外の子育て関与項目と「妻は私の気持ちを理解している」という項目との間には有意な関係が認められます。つまり、「おむつのとりかえ」をやっても夫は必ずしも「妻は私の気持ちを理解している」とは思わないということになりますが、その他の七つの子育て関与行動をとっている場合は、夫は「妻は私の気持ちを理解している」と考える傾向があるようです。同様に妻に対する満足度は「勉強をみてやる」と「おむつのとりかえ」以外の子育て関与項目との間に有意な関連が認められます。ま

た、「夫婦関係」の良しあしは、「しつけ」「相談相手」「病気の看病」「本を読んであげる」の四つの項目との間に有意な関連があります。

結 語

以上われわれが実施した調査結果のごく一部を紹介したにすぎませんが、われわれのこの調査だけでは、まだ父親の「親としての自覚」や「人間としての成熟」が子どもの発達とどのようにかわるのか、明確に結びつけることはできません。しかし、子育てに関与する度合いが大きい父親ほど父親としての自覚が強く、人間としても成熟したと感じている実態があるということは、子育てに父親も関与することが、子どもの成長発達にとってよい環境をつくることにつながることを意味しているともいえるのではないかと考えられます。研究上は、今後さらに、問題のある子ども、育てにくい特徴をもった子どもなどについてのケース

こうしてみると、夫婦のパートナーシップがよいので夫が子育てに関与することになるのか、夫が子育てに関与するから夫婦のパートナーシップがよいという認識をもつのかわかりませんが、いずれにしても夫婦のパートナーシップと夫の子育て関与との間には、密接な関連があるといえるようです。

研究や比較研究なども行い、父親と子どもの発達を相互的に捉えていく必要があると考えています。

付記

ここでとりあげた調査研究は、(財)小平記念会家庭教育研究所の平成三年度奨学金の交付を受けて、牧野の他、中原由里子(現姓新谷由里子、日本女子大学院文学研究科教育学専攻博士課程)及び村松幹子(日本女子大学教育学科助手)の三名が共同で行ったものです。日本発達心理学会での発表は牧野が行いましたが、データの分析・作表などに関しては他二名に負うところが多いことを明記して感謝します。